

近代における釧路港の形成過程と倉庫建築の評価・保存活用に関する研究

西澤 岳夫*

A study on the evaluation, preservation and utilization, concerning the development process of Kushiro port warehouse, in the modern ages

Takeo NISHIZAWA

Abstract -This paper deals with the process of renovation of a storehouse to cultural facility, built in the Meiji era, and with the citizens activity for preservation and use of it. Additionally, in this report, I describe problems on the side of the management, importance of connection and subsidy system in local society and so on.

Key word : Historical property, warehouse, Preservation, Reuse, Citizen's activity

はじめに

本稿は、2008年6月に北海道大学に提出した学位請求論文の公開論文説明会配布資料に若干の編集を加えたものである。

序章

近年の港湾再開発では、明治から昭和期に建設された倉庫建築を近代化遺産として位置付け、積極的に保存活用しようという動きが一部で見られるものの、地方の中小港湾都市においては、それらの価値が十分評価されず、取り壊される事態が依然続いている。近年の釧路港における事例としては、釧路川右岸に所在した築50年を迎える木造倉庫群が、2007年10月、再開発上「支障物件」として解体されている。また、港湾部における再開発や歴史的建築に関する研究については、多くの報告が見られるものの、指定文化財相当の建築を対象としており、中小港湾都市の倉庫建築については、未だ十分とは言えない状況である。

本論文は、このような状況を受け、地方の流通拠点である釧路港に建設された倉庫建築を事例対象として、近代に築造された港湾施設を保存活用という視点から見直し、近代化遺産としての価値評価指標について考察することを目的としている。

論文は全9章で構成されており、序章では、本研究の目的と背景、既往の研究や報告書について述べるとともに、研究対象とした釧路港の現況のあらましを述べた。

*釧路高専建築学科

1. 近代日本の港湾と築港事業の展開について

第1章では、近代日本における港湾と築港事業を概観し、戦前迄の釧路港の位置付けを論じた。まず、築港関連図書（廣井勇『日本築港史』（1927）など）をもとに当時の修築状況を確認することで、釧路港より他の外国貿易上重要な大築港が優先的に費用と人材、新技術が当てられていた事実を指摘した。次に、大正期に発行された統計資料（鉄道省『北海道の港湾』（1925）および北海道庁『港湾要覧』（1926））をもとに、釧路港と道内主要港湾（函館、小樽、室蘭各港）を比較・分析し、設備や港勢面で、釧路港が相対的に劣っていたことを指摘し、こうした施設の不備が、北海道東部の要衝に位置する釧路港とはいえ、貿易量や出入船舶数に影響を与えていた可能性を明らかにした。

しかし、その一方で、鉱産、林産資源といった後背地から産出される資源の集散基地として重要な役割を果たすことが求められていた事実もまたあわせて指摘した。（以上、表1から表6、図1から図8、写真1、写真2を参照）

2. 釧路港の発生と形成過程

第2章では、近代における釧路港の形成過程について、当時の産業の変化と修築計画の変遷を中心に論じた。釧路港の歴史を江戸期の交易所設置に求め、漁業集落が商港と漁港を兼ねた港湾へ発展してゆく過程を、鉱業、林業、農業、漁業の各視点から示し、築港事業の起工（1909）より先に、官営鉄道が開業したことや、防波堤・埠頭などの不備などから、釧路川筋を利用し

た舁輸送が主体となり、港湾施設が市街地に隣接する釧路川左右岸に卓越したことを明らかにしつつ、物流拠点として十分な機能を発揮できない状況であったことを明らかにした。

また、戦後の釧路川兩岸の再編について触れ、倉庫建築の評価・保存活用の問題と釧路港の関連付けを行った。

3. 釧路川右岸倉庫街の形成

第3章では、釧路川右岸に倉庫街が形成される過程を論じた。釧路川右岸の倉庫街は、官営鉄道敷設とともに、駅構内から釧路川右岸沿いに延びる官営鉄道の支線と平行して形成されており、その過程を、倉庫業者及び運送業者の成立を軸に、当時の市街地図を用いて明らかにした。また、第2章で示した倉庫建築の総床面積が道内主要港に比べ伸びなかった要因として、埠頭建設の遅れと、釧路の気候が貨物の野積みを許したことなどを指摘した。(以上、図9から図11を参照)

4. 三上運送株式会社と釧路港

第4章では、釧路川左右岸の倉庫建築を数多く所有した三上運送株式会社(現釧路倉庫株式会社)を事例に、昭和初期までの港湾運送業者と釧路港の関係について論じた。三上運送の前身は、十勝国大津で創業した三上回漕店であったが、釧路・帯広間の鉄道開通を契機に、釧路へ移転(1906)し、釧路港修築が未着工のため、安全な舁輸送が可能な釧路川右岸に店舗と倉庫を構えた。主に十勝農産物や木材を扱っていたが、以後、吸収合併を繰り返し成長した三上運送は、日本郵船株式会社の代理店になるなど、釧路港内で最大手の運送業者となる。本章では、こうした同社の沿革と荷役現場などの状況を示すことで、釧路川筋が物流機能の中心地として発達したこと、およびその限界を明らかにした。

5. 釧路における木骨煉瓦造倉庫の遺構と建築的特徴

第5章では、釧路港に現存する明治末期建設の倉庫建築の特徴について、実測や史資料の調査結果をもとに論じた。調査対象は、上記運送業者らが建設した3棟の倉庫建築である。このうち2棟が現役の倉庫(浪花町1番・2番倉庫)であり、残る1棟が文化施設(浪花町16番倉庫)へ転用されている。これら倉庫の評価すべき点として、近代の流通産業を象徴する建築であること、全国的にも建築例が少ない木骨煉瓦造であること、郷土の文化人に縁があること、古い倉庫建築が持つ美的風合いがあること、群として特徴ある景観を

形成していることなどを示し、ともに釧路港にとって希少な近代化遺産であることを明らかにした。しかし、施設の老朽化や港湾機能移転などにより、倉庫建築としての機能は低下しており、2棟の現役倉庫も解体の可能性にあることを指摘した。(以上、図12から図17を参照)

6. 釧路市浪花町十六番倉庫の保存活用

第6章では、倉庫建築の保存活用の実態について、浪花町16番倉庫を事例として論じた。同倉庫は市民運動の萌芽から1年半足らずでイベントホールに再生され、現在NP0が運営している。この保存活用に至る経緯の分析から、これまで文化財の指定に及ばなかったような倉庫建築の再生には、建築の価値と将来像の共有、地元有志による戦略的な組織造りや自治体への働きかけ、市民を巻き込んだイベント開催、補助金制度の有効利用などが、重要であることを指摘した。また、貸館受付簿の分析から、再生後の多様な利用形態や夜間利用者の実態を把握し、既存の公的ホールにはない自由度の高い利便性が、活用実態の大きな特徴の一つであることを指摘した(以上、表7から表11、図19、図20、写真3を参照)。

7. 近代化遺産としての倉庫建築の評価と保存活用の可能性

第7章では、5章、6章の分析結果を受け、近代化遺産としての倉庫建築の評価と保存活用の可能性について論じた。近代に築造された港湾は市街地中心部に隣接することが多く、再開発による快適な水辺空間創出の可能性を有している。本章では、倉庫建築を近代化遺産として保存活用する上で、建築の個性である歴史・意匠・材料・技術などを正しく伝える事の必要性、登録文化財制度の有効性、活動主体としてのNP0や第3セクターといった中間組織の重要性を示し、倉庫建築の価値評価指標として、産業史的価値、歴史的価値、美的価値、景観的価値、活用価値、市民意識価値の6項目を提案し、これら価値評価指標が個々に成立しているばかりではなく、それぞれが互いに関連し価値を強める関係にあることを指摘した。

また、国土交通省の「みなとまちづくり」(2003～2004)の事業例から、近年の動向を分析し、保存活用の対象が太平洋戦以降に建設された倉庫建築へ漸次移行していることを明らかにした。(以上、図21を参照)

終章

終章は、本研究のまとめであり、各章末尾に記した

小結を要約するとともに、今後の課題を述べた。本研究では、明治末期に建設された釧路市所在の浪花町十六番倉庫を通して、地方の中小港湾都市における倉庫建築であっても、保存活用が如何に重要な意味を持つ

表 1（原文中 表 1-3）各港の大正末期における貿易量

No	港湾名	起工年 (西暦)	入港商船数 (単位:隻)	登簿トン数 (単位:t)	輸移出入貨物量 (単位:t)
01	長崎港	1882	6,460	4,200,000	記載なし
02	横浜港	1889	99,000	16,000,000	12,230,000
03	函館港	1895	9,000	3,500,000	2,540,000
04	新潟港	1896	2,420	574,000	710,000
05	小樽港	1897	6,600	7,400,000	2,330,000
06	大阪港	1897	181,400	15,510,000	10,360,000
07	神戸港	1906	76,000	22,000,000	10,800,000
08	釧路港	1909	650	526,000	520,000
09	室蘭港	1918	3,700	2,370,000	2,370,000
10	東京港	1922	4,000	1,400,000	3,000,000

廣井勇『日本築港史』(1927)をもとに作成

表 2（原文中 表 1-4）各港の港内水面積 単位:坪

水深	函館	小樽	釧路	室蘭
6 尺未満	63,845	32,030	224,720	
6 尺以上 12 尺未満	123,723	47,028	131,680	
12 尺以上 18 尺未満	144,900	129,052	134,520	351,958
18 尺以上 24 尺未満	145,520	145,695	92,867	522,735
24 尺以上 30 尺未満	145,520	263,632	41,745	462,056
30 尺以上 36 尺未満	297,990	228,672	37,207	423,278
36 尺以上 42 尺未満		176,973	7,260	325,287
42 尺以上		276,787		314,686
合計	921,498	1,299,869	669,999	2,400,000

『港湾要覧』より作成

表 3（原文中 表 1-5）函館港沿岸部における倉庫の棟数と坪数

倉庫名称	棟数	坪数	倉庫名称	棟数	坪数
弁天倉庫	8	2,561	蒲田倉庫	3	466
小熊倉庫	11	1,519	田畑倉庫	9	879
森倉庫	7	509	龍紋倉庫	10	1,440
金森倉庫	21	2,465	佐々木倉庫	7	2,375
安田倉庫	11	2,406	葛西倉庫	8	893

合計棟数: 95 棟 合計坪数: 15,513 坪

表 4（原文中 表 1-6）小樽港沿岸部における倉庫の棟数と坪数

倉庫名称	棟数	坪数	倉庫名称	棟数	坪数
稲積倉庫	10	1,369	西谷倉庫	4	424
板谷倉庫	6	591	郵船倉庫	9	1,587
猪股倉庫	6	532	集鱗倉庫	2	528
小樽倉庫	5	599	右近倉庫	1	297
岡崎倉庫	7	428	藤山倉庫	3	485
高橋倉庫	7	1,796	佐藤倉庫	2	566
岡田倉庫	4	190	小樽物産	1	770
浪華倉庫	5	954	廣海倉庫	2	190
中村倉庫	18	1,399	渋澤倉庫	16	2,040
共同倉庫	10	2,722	木村倉庫	1	50
小樽商品倉庫	4	490	漁港倉庫	2	282
北部倉庫	2	240	北海製罐倉庫	2	1,829
栗山倉庫	2	480	専売局倉庫	9	996
日東倉庫	4	155	糧秣廠倉庫	1	212
小樽木材倉庫	2	150			

表 5（原文中 表 1-7）釧路港沿岸部における倉庫の棟数と坪数

倉庫名称	棟数	坪数	倉庫名称	棟数	坪数
三上倉庫	9	3,021	前田倉庫	3	577

合計棟数: 12 棟 合計坪数: 3,598 坪

表 6（原文中 表 1-8）室蘭港沿岸部における倉庫の棟数と坪数

倉庫名称	棟数	坪数	倉庫名称	棟数	坪数
栗林組倉庫	4	610	三井倉庫	1	168
王子倉庫	3	569	樽崎倉庫	1	180
流安倉庫	1	196	小田流倉庫	2	504
富士倉庫	1	168			

合計棟数: 13 棟 合計坪数: 2,395 坪

表 1-5～表 1-8 ともに『北海道の港湾』より作成

かを示してきた。今後は、太平洋戦争以降に建設され高度経済成長を支えた倉庫建築へも保存活用の裾野が広がり、より明確な評価軸が求められるようになると思われる。

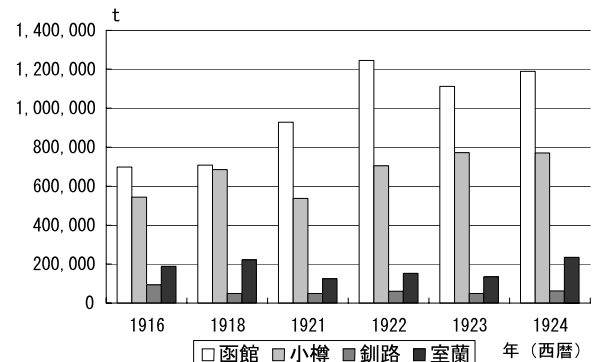


図 1（原文中 図 1-16）各港の総輸入量の推移

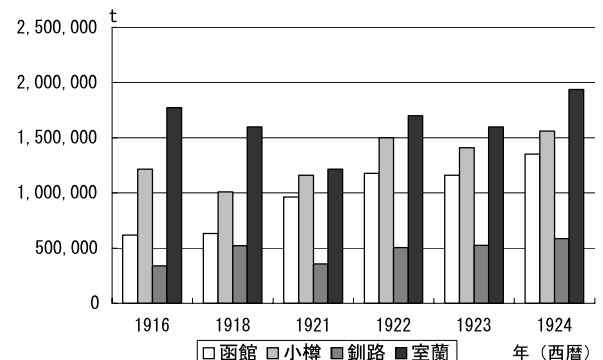


図 2（原文中 図 1-17）各港の総輸出量の推移

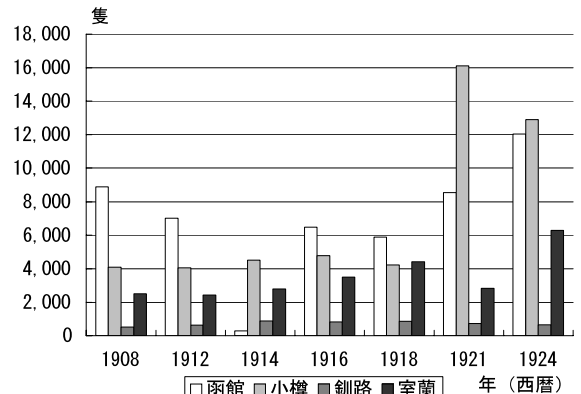


図 3（原文中 図 1-18）各港の総入船数の推移

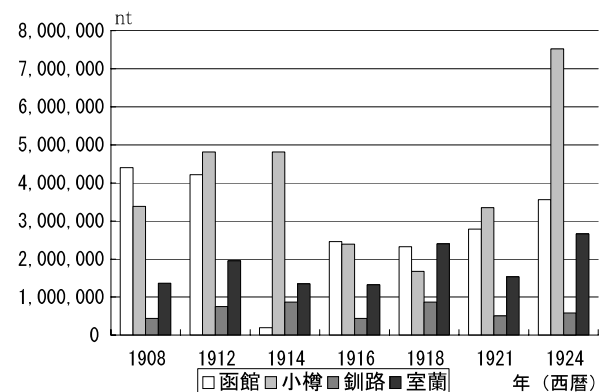


図 4（原文中 図 1-19）各港の総登簿トン数の推移

上記図 1-16～図 1-19 は『港湾要覧』より作成



写真1(本文中 写真1-10) 連絡船貨車積卸作業
『北海道の港湾』より転載



写真2(本文中 写真1-13) 手宮石炭船積高架棧橋遠望
『北海道の港湾』より転載



図5(本文中 図1-22) 釧路港の倉庫分布図



図6(本文中 図1-20) 函館港の倉庫分布図

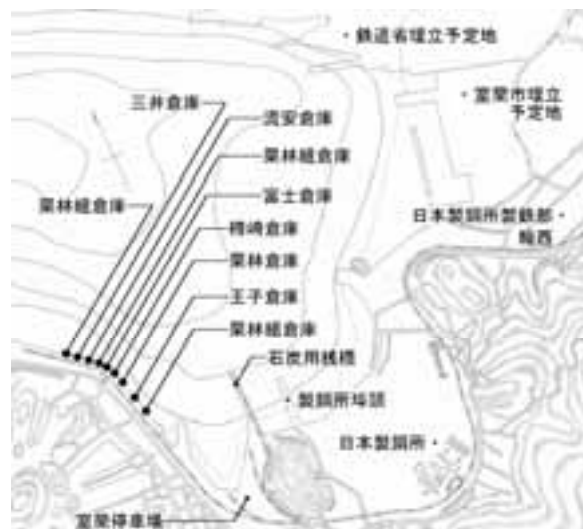


図7(本文中 図1-23) 室蘭港の倉庫分布図

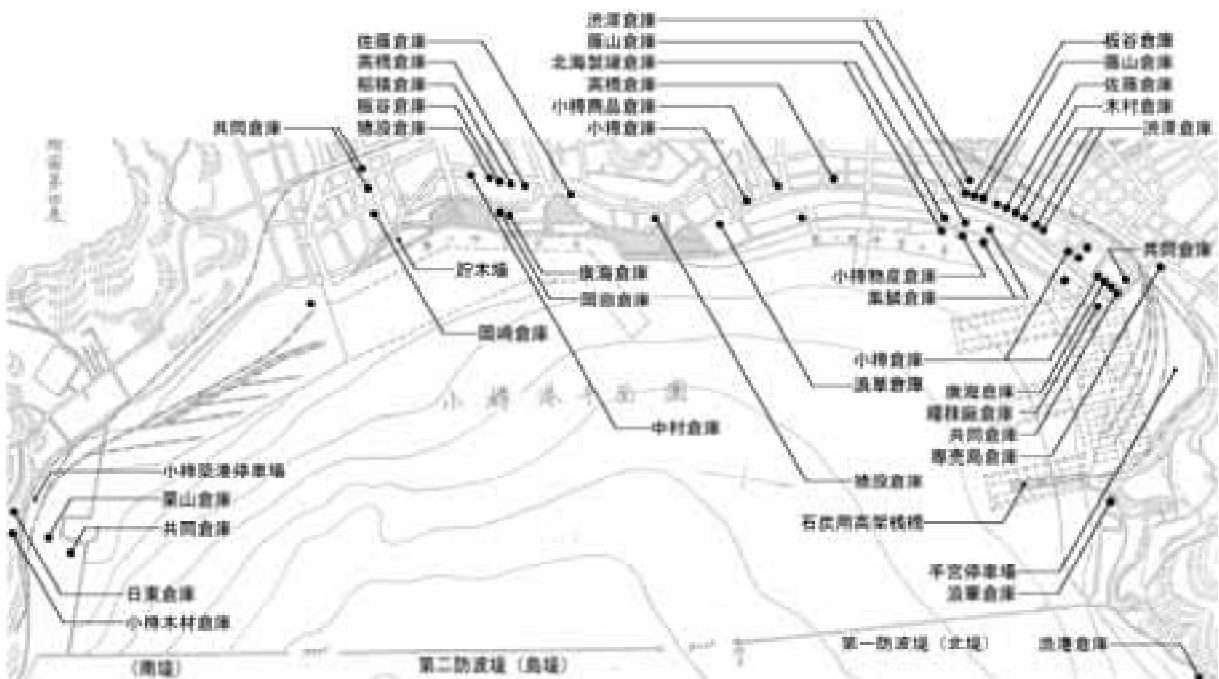


図8(本文中 図1-21) 小樽港の倉庫分布図

図1-20～図1-23は『北海道の港湾』より作成
※ 図1-20～図1-23中の破線は埋立、または埠頭建設予定地を示す。



図9（本文中 図3-12）1930（昭和5）年頃の釧路川河口付近の運送業者・倉庫業者

『釧路市街図』(1930 頃)をもとに作成
作成者・発行所ともに不明

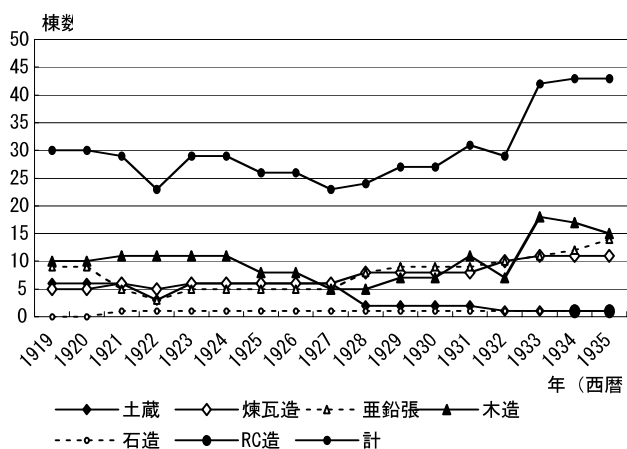


図 10（原文中 図 3-14）釧路港における倉庫数の推移

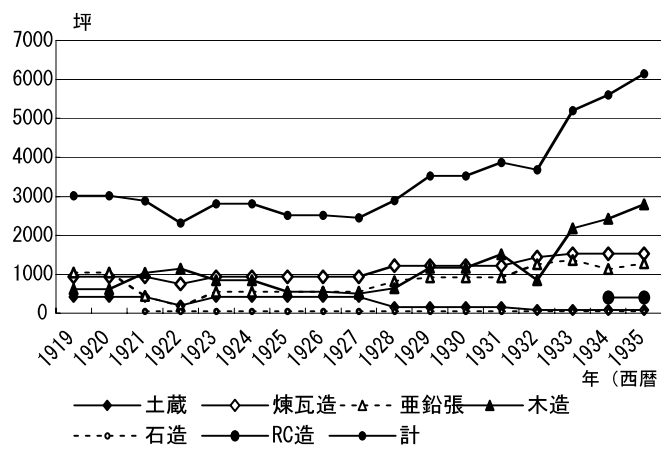


図 11 (本文中 図 3-15) 釧路港における倉庫面積の推移



図 12 (原文中 図 5-7) 浪花町 16 番倉庫および浪花町 1 番, 2 番倉庫 (真上が真北)

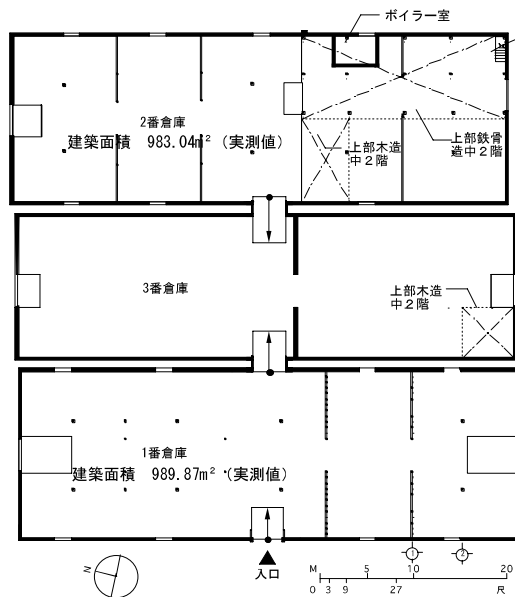


図 13 (原文中 図 5-3) 浪花町 1 番, 2 番, 3 番倉庫, 実測平面図
上から 2 番倉庫, 3 番倉庫, 1 番倉庫

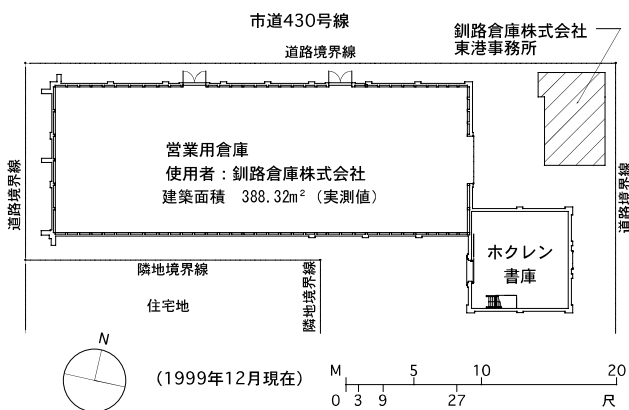


図 15 (原文中 図 5-8) 浪花町 16 番倉庫 1 階平面図 (改修前)

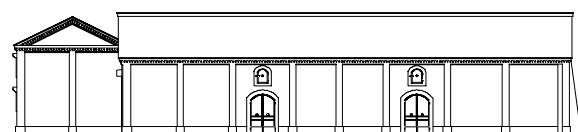
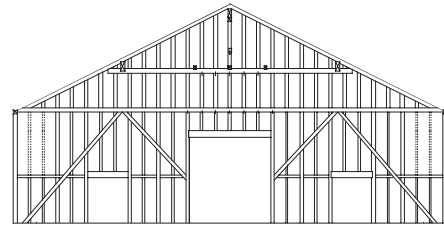
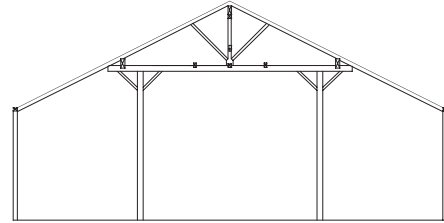


図 16 (原文中 図 5-9) 十六番倉庫立面図 (北側立面図)



「図 5-3」中 1 通りの小屋組



「図 5-3」中 2 通りの小屋組

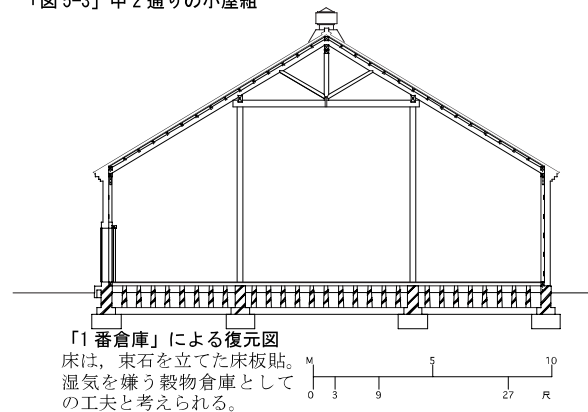


図 14 (原文中 図 5-5) 1 番倉庫断面図

下段の断面図は前掲「1 番倉庫」の図面をもとに復元したもの。「図 5-3」中 2 通りの小屋組に類似しているが、母屋を支持する構造に変更がみられる。

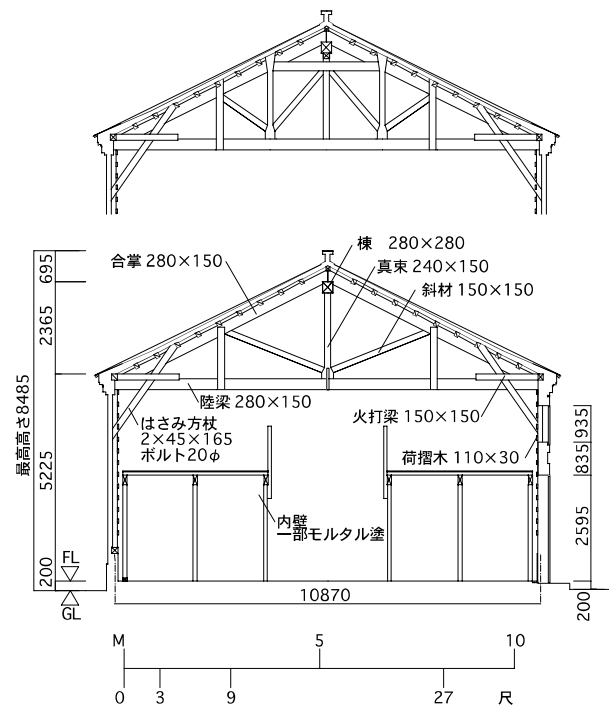


図 17 (原文中 図 5-10) 16 番倉庫断面図および小屋組図

近代における釧路港の形成過程と倉庫建築の評価・保存活用に関する研究

表 7（本文中 表 6-1, 6-2, 6-3） 浪花町十六番倉庫の保存活用に至るまでの経緯年譜 その 1（1998. 12. 10～1999. 11. 30）

年月日	＜十六番倉庫の運営主体組織＞／● 行政 ／○ その他（建設・設計関係）
1998. 12. 10	＜世話人会＞市民有志らが世話人会を発足。16 番倉庫を市民の自主運営可能な文化施設に転用できるか検討開始。人数 11 名。構成員は、北海道新聞釧路支社長、造形作家、喫茶店店主、印刷会社社員、建築設計事務所所長、イベント会社社員、北海道新聞記者、釧路市職員、北海道職員など。技術的問題、経費見積りなどのための調査項目の確認をした。
1998. 12. 13	＜世話人会＞十六番倉庫の内外部を見学。消防法、建築基準法などの関係法規について、建築指導課へ確認する内容を検討。先進事例に学ぶため、同様の取り組みをしている恵庭市の「夢想館」に活動内容を照会。
1998. 12. 25	＜世話人会＞これまでの調査結果を報告。改修費用の概算見積りを 6,000 万円と試算。
1999. 01. 10	＜世話人会＞市民運動として取り組み、実現可能であるとの結論に達する。賛同する市民へ呼びかけを始める。
1999. 01. 22	＜世話人会＞多数の市民へ呼びかける方法を検討。フリーディスカッションの場を設けることに決定。
1999. 02. 03	＜世話人会＞ディスカッションの内容を検討。
1999. 02. 04	「16 番倉庫の保存と活用を考える」会（生涯学習センター）主催：世話人会。公募により参集した市民と「世話人会」の初会合を開催。参加人数 55 名。「世話人会」から①釧路港の歴史と現在の問題点、②産業遺産の文化施設転用への可能性、③北海道の補助事業とその先例、④16 番倉庫の規模と立地条件の優位性、⑤所有者と利用者の前向きな回答。⑥建物の概要と強度問題、⑦建物の消防法上及び建築基準法上の問題、⑧予想される改修費と運営費などについて報告があり、同時に資金の捻出方法、運営主体に関する提案があった。実現に向けてのフリーディスカッションの場では、近隣住民らの理解、資金調達の目処や設備等に懐疑的な意見がある一方、①歴史的建造物を再生させることの意義について、②自主管理運営による 24 時間利用可能な施設が持つ多様な利用方法について、③資金の捻出方法などについて活発な発言があった。ディスカッション終了後に、実現後の運営主体となりうる NPO と北海道の補助事業「地域文化ネットワーク形成促進事業」に関する勉強会を行い、今後の対応方針を検討した。
1999. 02. 09	芸術環境フォーラム「16 番倉庫の保存と活用を考える」の開催（道新ホール）。主催：世話人会。参加人数 33 名。基調講演 衛 紀生（演劇評論家、地域文化オルガナイザー、舞台芸術環境フォーラム代表、神戸シアターワークス代表）金沢市民芸術村、パビオ・ビールーム（福岡市音楽・演劇練習場）を事例に市民による自主運営の芸術文化活動の手法を検討する。
1999. 02. 19	＜世話人会＞十六番倉庫のコンセプトづくりと中心メンバーの構成についてフリートーキング。
1999. 03. 04	＜世話人会＞十六番倉庫のコンセプトづくりと中心メンバーの構成についてフリートーキング。
1999. 03. 19	＜世話人会＞コンセプトについてフリートーキング。
1999. 04. 16	＜世話人会＞「十六番倉庫準備検討委員会」（以下検討委員会）設立。「世話人会」に新しいメンバーを加え「検討委員会」に改組。人数 26 名。新たな構成員として、電気設備会社社員、画廊経営者、木材会社社員、信金組員らが加わる。設計事務所代表の委員が改修計画案の作成にとりかかる。
1999. 04. 22	＜検討委員会＞新しいメンバーを対象に十六番倉庫を視察。
1999. 05. 14	＜検討委員会＞新しいメンバーを対象に十六番倉庫を視察。
1999. 05. 15	○ 月曜塾*：浪花町十六番倉庫の現地調査を実施。外壁の損傷箇所の確認。小屋組図と倉庫の概略図の作成。 ※：地元建築士で組織されたグループ
1999. 06. 14	＜検討委員会＞文化施設転用のためにかかる総費用の概算報告が提出される。 建設費 3500 万円、備品 500 万円、運営費年間 300 万円。利用料金の試算。
1999. 07. 06	＜検討委員会＞経費積算と資金計画、市担当部局との折衝状況、所有者と利用者との折衝について報告があった。所有者と利用者との折衝報告では、現所有者（ホクレン農業協同組合連合会）と使用者（釧路倉庫株式会社）、使用者の親会社（三ツ輪運輸株式会社）に意向を確認した結果、当会活動に便宜を図る事を約束し、十六番倉庫の文化施設転用が現実となることを前提に、所有者は賃貸を、使用者は空け渡しを承諾。主な賛同理由：港の主な運送業務が新港である西港に移転したこと、古いれんが倉庫を再生する事業に対して好感が持てること。なお、現時点の十六番倉庫の主な取扱商品は建築資材であった。審議事項は「16 番レンガ倉庫を実現する会」設立総会準備、役員候補の選出、実現へ向けてのタイムスケジュール等。
1999. 07. 09	＜検討委員会＞「16 番レンガ倉庫を実現する会」（以下実現する会）設立総会を開催（福祉会館）。検討委員会は「実現する会」に改組。これまでの経過と維持費試算結果を報告。利用料金原案を提出。役員選出：会長 1 名（開業医院長）、副会長 1 名（元女性奉仕団体職員）、理事 12 名（建設会社代表、設備会社代表、衣料店代表、司法書士、造形作家、北海道新聞支社長、釧路和商共同組合理事、劇団員、中小企業家同友会、釧路市職員、北海道職員など）、理事兼事務局長 1 名（インテリアデザイン事務所代表）、監事 2 名（税理士、劇団員）。運営委員会を設立：運営委員長 1 名（生活クラブ生協）、他十数名の運営委員（公務員、団体職員、開業医、劇団員、主婦、画家、電気設備会社社員、教員、学生等）。運営委員は定数を設けず随時募集。以降、毎週金曜日夜に生涯学習センターで運営委員会を開催。
1999. 08. 06	＜実現する会＞ 第 1 回役員会開催。
1999. 08. 11	＜実現する会＞「実現する会」会長 1 名、理事 1 名が釧路市長を訪問。当会の趣旨説明を行い助成金について問い合わせる。
1999. 08. 18	＜実現する会＞「実現する会」会長 1 名、理事 1 名が釧路市長を再度訪問。助成金を陳情。1,500 万円の補正予算を 12 月定例市議会に提案することを約束。
1999. 08. 24	＜実現する会＞第 2 回役員会開催。協議会の設立と NPO への改組の必要性を再確認。主な理由：①持続的な運営母体の形成、②北海道補助金の受け皿。
1999. 09. 07	＜実現する会＞「浪花町十六番れんが倉庫協議会」（以下協議会）設立。「実現する会」は「協議会」に改組。参加者 33 名。「浪花町十六番倉庫協議会規約」の承認。役員組織は「実現する会」役員の留任。運営組織も「実現する会」運営委員の留任とし、引き続き随時募集をかけることとした。特定非営利活動法人「浪花町十六番倉庫」定款（案）の審議。申請書類の確認。2000 年度の事業計画書の審議。運営委員会への参加協力と寄付金を市民へ呼びかける（地域情報紙、ピラ撒き、ロコミなど）。寄付金は学生や若者でも協力しやすいように一口 1000 円に設定。オーナー会員の募集を開始。年会費は 10000 円。「地域文化ネットワーク形成促進事業」（北海道）の補助金の公募に対して、地域創造アトリエ整備計画書を提出（9 月中旬）。
1999. 10. 22	＜協議会＞NPO 設立に関わる申請書を釧路支庁に提出。釧路信金から 10 万円の寄付を受ける。
1999. 10. 27	○ 月曜塾・釧路高専：実測調査。外部の実測。
1999. 11. 01	＜協議会＞釧路倉庫（株）に工程表を提出。1 月末の空け渡しを検討してくれるとの回答を得る。
1999. 11. 05	○ 月曜塾・釧路高専：実測調査。内部の実測。
1999. 11. 09	＜協議会＞道補助金交付のための現地プレゼンテーションを道選定委員に実施。 選定員から意見書を受け取る。内容は保存活用の趣旨に対して一定の評価を得るものだった。
1999. 11. 30	＜協議会＞経過報告：市民からの寄付金累計 270 件、138 万円。地域創造アトリエ整備選定に関する意見書への回答について議論。

表 8 (本文中 表 6-3) 浪花町十六番倉庫の保存活用に至るまでの経緯年譜 その 2 (1999. 12. 08～2000. 04. 16)

年月日	＜十六番倉庫の運営主体組織＞／● 行政 ／○ その他（建設・設計関係）
1999. 12. 08～	● 釧路市：釧路市 12 月定例市議会に改修事業の補助金（1500 万円）を補正予算案として審議、可決。
1999. 12. 24	● 北海道：協議会提出の地域創造アトリエ整備（改修）計画書を承認し、1999 年度地域文化ネットワーク形成推進事業に選定。補助金 2,000 万円を交付。 ● 北海道：協議会の NPO 認可。 ＜協議会＞協議会は「特定非営利活動法人浪花町十六番倉庫」（以下 NPO 十六番倉庫）に改組。役員、運営委員両組織とも留任。運営委員は引き続き随時募集をかけることとした。
2000. 01. 16	NPO 十六番倉庫の目的：釧根地域の人々、または釧根地域を愛する人々と共に、芸術文化活動に関する事業を実施、或いは企画して、地域の振興に寄与する。（以上、十六番倉庫定款からの抜粋） ＜NPO 十六番倉庫＞工事請負契約を交わす。 請負者：晃盛田中工務店株式会社（釧路市）、請負金額：33,915,000 円、 管理者：MOBI 建築・都市研究所辻谷英樹（「検討委員会」元委員）
2000. 01. 20	＜NPO 十六番倉庫＞釧路市へ建築確認申請書提出。北海道へ公共施設新築等工事届書提出。
2000. 02. 04	「前夜祭」開催。主催：NPO 十六番倉庫。一般市民への十六番倉庫内部の公開と経過説明。主催者側の NPO 十六番倉庫と一般市民が、十六番倉庫の利用方法の可能性とオープニングイベントについて話し合う。 (市民集会 3)
2000. 02. 09	● 釧路市：建築確認申請書認可。 ○ 工事請負業者：改修工事開始。
2000. 02. 25	＜NPO 十六番倉庫＞経過報告：寄付金累計 370 件、220 万円。オーナー会員 67 名。
2000. 03. 17	○ 建設事業協会：300 万円を寄付。
2000. 03. 30	○ 工事請負業者：工事完了
2000. 03. 31	● 釧路市：工事完了検査 ● 北海道：地域創造アトリエ選定委員会による工事完了後の審査。 ＜NPO 十六番倉庫＞備品搬入。備品は 1999 年秋に閉館した JR シアター（1993 年に JR 札幌駅構内に建設された劇団四季の劇場）、2 月末で閉店した市内デパートなどから譲り受けたもの。高所作業台、ロッカー、パイプ椅子、ステージ台、座布団、鏡、テーブル、暗幕、その他多数、150 点あまり。
2000. 04. 16	＜NPO 十六番倉庫＞グランドオープン。オープニングイベントの開催（04. 16～05. 07）。市内パレード。

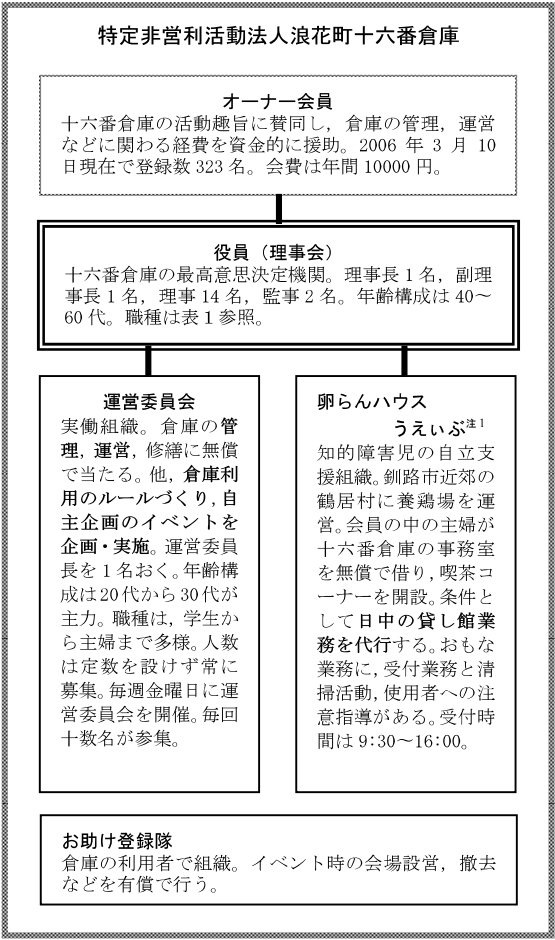


図 18 (本文中 図 6-2) 十六番倉庫組織図
図中注記 1：2009 年現在、「卵らんハウスうえいぶ」による受付業務は終了。連絡先電話番号は変わらず、当 NPO 事務局長のオフィスへ転送されるよう変更。

表 9 (本文中 表 6-4) 21 時以降の利用実績 (単位：日)

年度	‘00	‘01	‘02	‘03	‘04	‘05	累計(%)
項目							
21 時以降の利用があった累積日数	171	241	118	129	85	89	833
十六番倉庫の利用があった累積日数	315	336	234	194	169	204	1452
21 時以降の利用日数が占める全体の割合(%)	54.3	71.7	50.4	66.5	50.3	43.6	57.4

表 10 (本文中 表 6-5) 利用主体別の利用実績 (単位：日)

年度	2000	2001	2002	2003	2004	2005	割合(%)
項目							
＜舞台芸術＞ 演劇、舞踏、パントマイム、人形劇等	75	156	32	47	34	74	20.1
＜音楽活動＞ コンサート、練習等	101	257	170	80	110	150	41.8
＜展覧会＞ 写真、彫刻、絵画、建築関連等	19	13	26	2	6	1	3.2
＜集会＞ 講演、講習、会議等	111	88	28	44	32	17	15.4
自主企画イベント	10	13	19	22	18	3	4.1
＜運動＞ スポーツ、ヨガ等	109	25	27	53	14	22	12.0
バザー・フリーマーケット	6	10	13	5	9	5	2.3
ファッションショー、ヘアショー等	5	1	4	1	4	3	0.9
結婚式	1	0	0	0	0	0	0.0

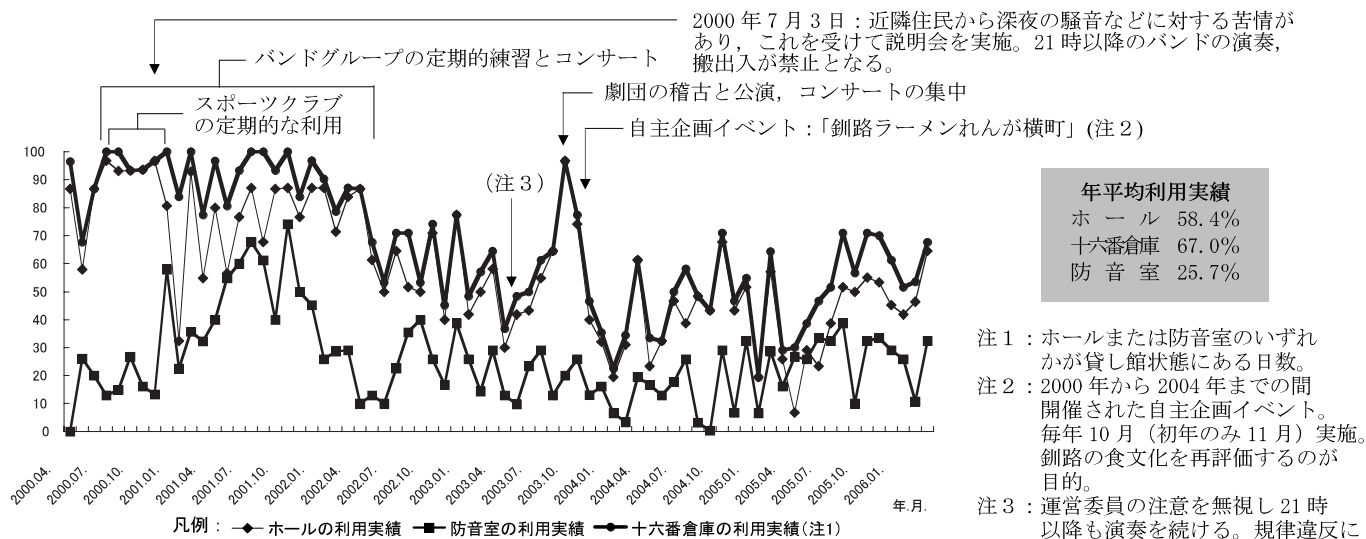


図 19（原文中 図 6-3）十六番倉庫の利用実績（各月の累積利用日数／各月の累積日数）

表 11（原文中 表 6-6）年度別収支決算の推移（単位：円）

年度		2000	2001	2002	2003	2004	2005
収入の部	正会員会費収入	1,770,000	2,280,000	2,100,000	1,810,000	1,520,000	1,360,000
	貸館収入	1,750,750	1,839,250	1,547,000	1,038,000	1,073,000	1,366,500
	寄付金収入	1,125,514	403,618	189,800	100,000	170,000	0
	イベント収入	4,472,200	8,496,231	4,675,300	1,240,155	1,471,254	613,668
	雑収入(注1)	353,132	385,098	1,140,490	393,474	1,077,846	163,758
	収入額合計(注2)	9,471,596	13,689,305	9,781,954	4,823,577	5,373,692	3,852,600
支出の部	地代家賃	1,253,700	1,253,700	1,253,700	1,253,700	1,253,700	1,253,700
	水道光熱費	1,394,756	1,437,310	1,242,722	1,090,583	1,075,876	1,193,474
	イベント費用	2,983,610	8,714,862	3,641,540	910,996	1,387,471	330,233
	通信費	212,961	239,528	256,465	197,050	132,269	129,219
	旅費交通費	29,600	38,230	114,032	34,300	22,800	25,000
	保険料	66,440	66,440	66,440	66,440	66,390	66,390
	消耗品費	359,450	777,642	1,084,273	328,502	224,359	320,509
	修繕費(注3)	2,378,693	273,073	1,072,500	151	0	0
	接待交際費	27,677	38,514	26,000	105,150	48,625	14,000
	顧問料	183,750	386,250	393,750	386,250	401,250	393,750
	法人税	133,200	80,000	80,000	80,000	80,000	75,000
	支払い手数料	39,695	9,555	8,820	8,820	8,820	8,820
	その他	122,956	244,837	299,764	300,043	323,458	140,474
	支出額合計	9,186,488	13,559,941	9,540,006	4,761,985	5,025,018	3,950,569
次期繰越収支差額		285,108	129,364	241,948	61,592	348,674	△ 97,969

(注1) 2002年度は本文注記5で受賞した各賞副賞を、2004年度は前々年度の修繕積立金を引き出して含めた値。
(注2) 当期収入額に前期繰越収支差額を加えた値。(注3)：修繕費用の多くは近隣住民からの要望を受けた防音工事。
2002年度は修繕積立金として支出扱いとした900,000円を含む。

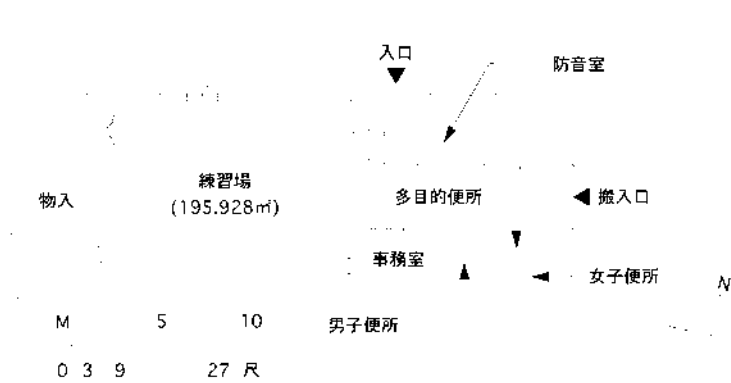


図 20（原文中 図 6-1）浪花町十六番倉庫 1 階平面図及び断面図



写真 3（原文中 写真 6-8）改修後の倉庫内観
内壁は、運営委員を中心とした市民ボランティアによって黒く塗装された。現在では物入れ上部とホールとの境に暗幕が降ろされ、ステージとしての正面性を備える。

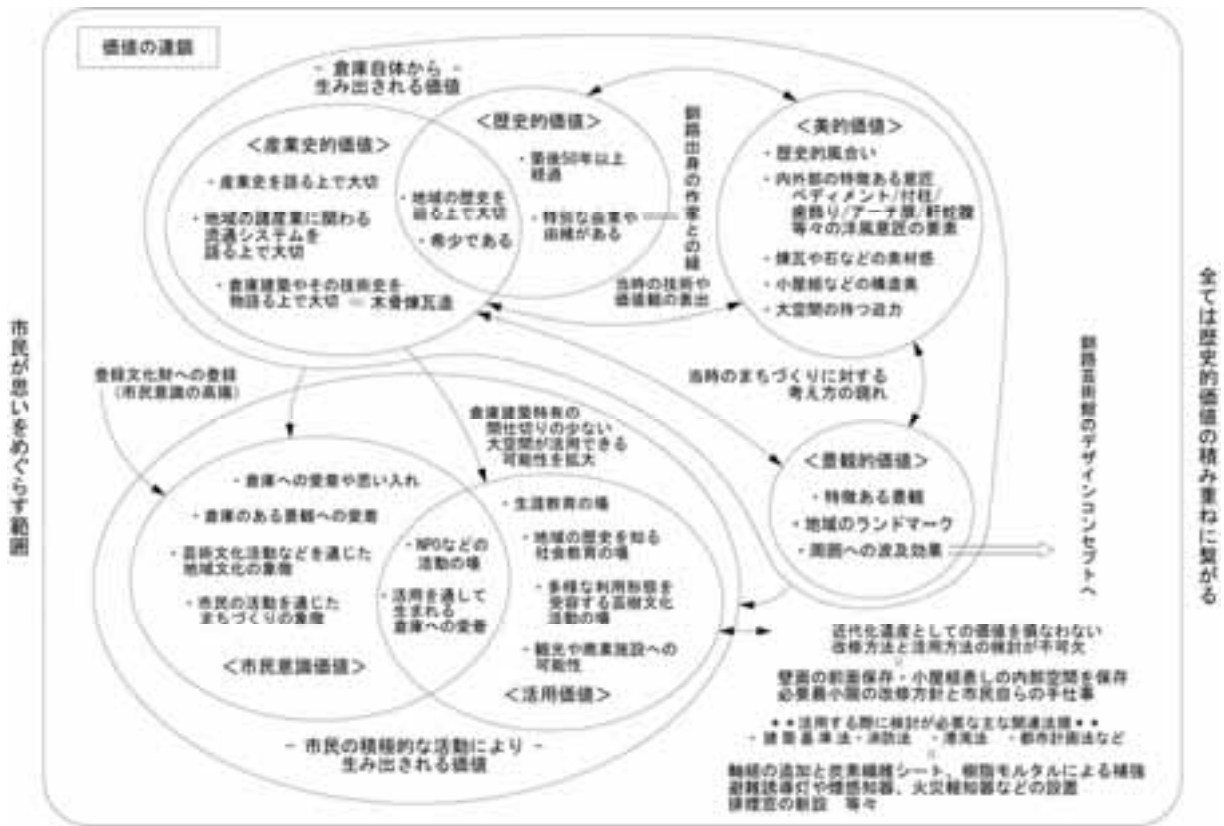


図 21 浪花町十六番倉庫を事例とした倉庫建築の価値評価指標(概念図)

主要参考文献

- 〔築港史一般〕
 廣井勇『日本築港史』丸善 1927、『日本港湾史』日本港湾協会 1978、寺谷武明『近代日本築港史』時潮社 1993、井上聖・樋口輝久・馬場俊介『近代日本の港湾における欧米諸国からの技術導入』土木史研究講演集 Vol.24 2004
- 〔北海道の港湾関連〕
 C. S. MEIK『FIRST REPORTS ON THE HOKKAIDO HARBOURS』北海道庁 1887、C. S. MEIK『REPORTS ON THE HOKKAIDO HARBOURS VOL. II』北海道庁 1890、シー・エス・メーク/寒地港湾技術研究センター訳『北海道の港湾・海岸に関する調査報告書〜今も生きている 100 年前の港湾計画〜』寒地港湾技術研究センター 1994、『北海道奥羽 港湾之状況』函館税関 1905、『築港要覧』北海道庁 1922、『築港要覧』北海道庁 1924、『北海道の港湾』鉄道省運輸局 1925、『港湾要覧』北海道庁 1926、『北海道庁に於いて施設したる港湾の概要』北海道庁港湾課 1939、岡本哲志+日本の港町研究会『港町の近代』学芸出版社 2008
- 〔釧路港関連〕
 古川忠一郎『釧路築港史』釧路実業調査会 1909、『釧路築港要覧』北海道庁釧路築港事務所 1911 頃、『釧路港海陸連絡設備』北海道庁土木部港湾課 1913〜1920、『釧路築港要覧』北海道庁釧路築港事務所 1922・1932・1936、齋藤秀三『埋立問題批判 釧路港論』釧路新聞社 1936、成田正徳編『釧路港と産業』釧路商工会議所 1939、荒井辰雄『釧路港 80 年のあゆみ』釧路作業船整備協会 1989、『くしろ 釧路開発建設部 40 年史』北海道開発局 1992、布施正『釧路港 一港湾形成の過程と背景』釧路叢書 第 30 巻 釧路市 1994、社団法人寒地港湾技術研究センター『釧路港建設史』北海道開発局釧路開発建設部釧路港港建設事務所 1998、『釧路港開港百年記念誌 21 世紀への波動』釧路新聞社 2000、酒井多加志『釧路港における港湾空間の発達過程』地学雑誌 第 111 巻 第 1 号 2002
- 〔釧路一般〕
 松浦武四郎『東蝦夷日誌』多気志樓 1873、高崎龍太郎『北海立誌図録』函館北島社 1890、寺島芳太郎・榎本武揚『北海道釧路図便覧』國進社 1907、佐藤正平編『釧路根北写真帖』釧路活版所 1914、『釧路町勢一斑』釧路町 1917、『釧路支庁要覧』北海道庁釧路支庁 1917、『釧路区勢一斑』釧路区 1921〜1923、『釧路市勢一斑』釧路市 1923、『釧路市案内』釧路市 1925、『釧路市勢要覧』釧路市 1925、『釧路国勢一覽』北海道庁釧路支庁 1926、同 1928、『釧路国支庁管内要覧』北海道庁釧路支庁 1927、『釧路国概観』北海道庁釧路支庁 1937、『釧路市勢要覧』釧路市 1927〜1933、同 1935、『釧路市案内』釧路市 1931、古川忠一郎『釧路発達史』古川忠一郎 1923、市史編纂室『新釧路市史 第三巻 社会・文化編』釧路市 1972、市史編纂室『新釧路市史 第二巻 産業経済編』釧路市 1973、市史編纂室『新釧路市史 第四巻 資料編』釧路市 1974、鳥居良四郎『ふるさとの思い出 写真集 27 明治 大正 昭和 釧路』図書刊行会 1979、佐藤尚『釧路歴史散歩(上)』釧路新書 第 9 巻 釧路市 1982、佐藤尚『釧路歴史散歩(下)』釧路新書 第 11 巻 釧路市 1983、釧路港 OB・戦前会『写真でみる釧路港の変遷』釧路作業船整備協会 1986、釧路市審議会市史編纂

ん事務局『市制施行 70 周年記念誌 目で見える釧路の歴史』釧路市 1992、釧路市地域資料室『街角の百年〜北大通・幣舞橋〜』釧路新書 第 25 巻 釧路市 2001、釧路市地域資料室編『写真絵巻書で見る 遠い日のくしろ』釧路叢書 第 35 巻 釧路市 2003

〔産業に関するもの〕

『鉄道』北海道土木局道路課 文書綴り 1927、『釧路炭田』研究会『釧路炭田資源とヤマの盛衰』釧路叢書 第 14 巻 釧路市 1974、『創立 60 年史』釧路倉庫株式会社 1979、太平洋石炭販売輸送株式会社 釧路臨港鉄道事業本部『臨鉄 60 年の軌跡』1984、三ッ輪運輸社史編纂委員会『三ッ輪運輸 55 年史』三ッ輪運輸株式会社 1986、三ッ輪運輸社史編纂委員会『当社創立前の釧路港(三ッ輪運輸 55 年史 別冊)』三ッ輪運輸株式会社 1986、釧路製紙工業史研究会『釧路の製紙(上)』釧路叢書 第 25 巻 釧路市 1987、寺島敏治『釧路の産業史』釧路叢書 第 30 巻 釧路市 1988、釧路製紙工業史研究会『釧路の製紙(下)』釧路叢書 第 27 巻 釧路市 1990、三木楯彦・市來清也『倉庫業及び港湾産業概論』成山堂書店 2005

〔人物・人名など〕

金子信尚編『北海道人名辞書』北海民論社 1923、渡邊源四郎『釧路の人物』釧路日々新聞社 1936、渡邊諒堂『東北海道の人物』釧路日日新聞社 1940、北海道総務部行政資料室『開拓の群像 下』北海道 1969、北海道総務部行政資料室『北海道開拓功労者関係資料収録 下巻』北海道 1972、高崎哲郎『評伝 山に向かいて目を挙ぐ 工学博士・広井勇の生涯』鹿島出版会 2003

〔保存活用〕

日本建築学会近畿支部環境保全部『近代建築物の保存と再生』都市文化社 1993、『建築雑誌』vol.108 NO.1346 日本建築学会 1993、『建築設計資料 45 保存・再生 まちづくりの核を仕組む創造行為』建築資料研究社 1994、大河直躬 編著『都市の歴史とまちづくり』学芸出版社 1995、『建築雑誌』vol.112 No.1400 日本建築学会 1997.1、大河直躬 編『歴史的遺産の保存・活用とまちづくり』学芸出版社 1997、日本産業遺産研究会・文化庁歴史的建造物調査研究会 編著『建物の見方・しらべ方』ぎょうせい 1998、木村勉・金出ミチル『修復 まちの歴史ある建物を活かす技術』理工学社 2001、鈴木博之『現代建築の保存論』王国社 2001、田原幸夫『建築の保存デザイン 豊かに使い続けるための理念と実践』学芸出版社 2003、角幸博・石本正明『北海道空知産炭地域における炭鉱遺産と価値評価について』国際鉱山ヒストリー会議 2003、大河直躬・三船康道 編著『歴史的遺産の保存・活用とまちづくり 改訂版』学芸出版社 2006

〔その他〕

北海道教育委員会編『北海道の近代化遺産 近代化遺産総合調査報告書』北海道 1995、日本建築学会北海道支部 歴史的組積造建築物保存研究委員会『歴史的組積造建築物の保存法に関する研究報告書』1997、『特定非営利活動法人浪花町十六番倉庫 利用記録』浪花町十六番倉庫 2000〜2005、『特定非営利活動法人浪花町十六番倉庫 収支決算書』浪花町十六番倉庫 2000〜2005